

ARIAN ROSE PRESENTS

NOVEL ANTHOLOGY



この甘い溺愛からは 逃げられません

～令嬢は貴公子様の
お気に入り～



Authors

玉響なつめ
まこ
櫻井みこと
星見うさぎ

Illustrator
カズアキ

大人のためのご褒美ノベルアンソロジー

大人のためのご褒美ノベルアンソロジー
**この甘い溺愛からは
逃げられません！**
～令嬢は貴公子様のお気に入り～

Contents



『不思議な夢と紡ぐ恋』

玉響なつめ

003

*

『元使用人は麗しの貴公子に
連れ戻される』

まこ

073

*

『婚約を解消されたばかりですので、
溺愛はご遠慮くださいませ』

櫻井みこと

141

*

『大好きな幼馴染が
英雄騎士になりました』

星見うさぎ

213

*

Characters

* 登場人物紹介 *

不思議な夢と紡ぐ恋

玉響なつめ



町娘

サフラン



?

ラハブ

田舎出身の平民。
幸運を付与する能力を持ち、
手先が器用で刺繡や
飾り紐を作るのが得意。

突然サフランの前に
現れた美青年。
まるで子供のよう
無邪気なところがあり、
浮世離れした雰囲気をもつ。

おかしいなつて、思つてたんだよ。

お祭りで賑わう町中、行き交う楽しそうな人たち。

本当なら、私がそこにいるはずじやないのつて思う光景があつた。

「カシム……どうして？」

「サフラン!? ええと、その……これは」

「あら、この人が例のカノジョさん？ 素朴かわいで可愛らしい方ね。でも残念、ご覧になつた通り彼はワタシと一緒にお祭りを回ることになつたの。この意味、わかるでしょ？」

年に一度のお祭りだから、一緒に回ろうねと言つた私に彼はなんて言つたつけ？

そうだ、『仕事が忙しいからまた来年』だ。

なのにこれはどういうこと？

彼は仕事の制服なんて着ていなかつた。

気合いの入つたデート服に身を包み、傍らには私と真逆の、スタイル抜群で可愛らしい女の子を侍らせているではないか。

見せつけるように腕まで組んじゃつて！

「サフラン、あのさ……」

「……お邪魔してごめんなさいね。それじや」

「あはは、ごめんねえカノジョさん！ 元気出してー！」

「おい、止めろよ……！」

言い争う声が背後から聞こえる。

もう私は振り返る気力もなくて、あの場にいたら泣いてしまいそうでただ必死にその場を後にすることしか考えられなかつた。

それもあつて、あの場から逃げるよう而去つて——目的もないまま、目についたテントに思わず入つてしまつたのだ。

「ごめんなさいねえ、まだ準備中なのよ……ってあらサフランちゃん？　えつ、どうしたの！」

冷静に考えると、よく確認もせずに飛び込むだなんてどれだけ迷惑なことかと思うけど……でもそこは幸いにも私も顔なじみの、薬局にお勤めの魔法使いであるメイおばさんの出店だつた。

顔見知りの存在に、思わず涙腺が緩む。

「いつたい全体どうしたんだい。ああ、ああ、泣いちやつて……誰に泣かされたの！　おばちゃんが文句言いに行つてやろうか？」

「ち、違うんです！　いや、違わないけど、あの……」

「ほら、こつちおいで。今あつたかいお茶を淹れてあげるから」

「あ、ありがとう、ござい……、う、うう……」

そつと私の背中をさすってくれるその手がすごく温かくて。

その温もりに我慢していたものが決壊してしまつたのか、私は勢いよく泣いてしまつた。

思えば、子供の頃以来の大泣きだつたかもしれない。

私はこの町の生まれじやなくて、ここから離れたところにある田舎いなかの出身だ。

優しい両親に兄弟たちがいて、平凡ながらに穏やかな暮らし。

成長してからは実家の稼業を弟が継いで、私と兄は家を出た。

それぞれ適正に合つた暮らしをしよう、困つた時は助け合おうと約束して、手紙でこまめにやりとりをしている。

みんな魔法を使えるから、仕事に生かすことも考えればやはり大きい町に出るのが一番だと安易な考え方で私はこの町に越してきた。

私には珍しい『幸運』を付与する能力があつた。

とはいえ、貴族の方などに取り立ててもらえるほどのものではない。せいぜいが『転びそうになつたけど耐えられた』とか『落とし物をする寸前で気がついた』とかそんな感じの、ツイてるね！ って笑い話になる程度のものだ。

町での暮らしは、順風満帆だった。

優しいご近所に恵まれた物件つてだけじやなく、その大家さんが経営している雑貨屋さんで雇つてもらえた。しかもそこに私が作った小物を置いてもらえて、売れればその分がボーナスとして入るっていう好条件だつたのは幸運以外の何ものでもないと思う。

そして働き始めた頃、巡回警備中のカシムに出会つたのだ。

Characters

* 登場人物紹介 *

元使用人は麗しの貴公子に 連れ戻される

まこ



元公爵家使用人

シリア



公爵令息

フェリシス

＊…………＊
子爵令嬢であったものの、

両親が事故で他界し、

公爵家の使用人になる。

両親の形見を買い戻した後は

使用人を辞め、

花屋で働いている。

＊…………＊
ライトナー公爵家の三男で

陸軍少将。

希少な魔法使いであり、

軍ではめざましい

活躍をしている。

屋敷の玄関前に使用人たちが大勢出る。

急いで身支度を終えたシシリ亞もその内の一人だった。

「彼の武運を祈り、ここに祝福を授ける」

ひやびます

王宮からやつて来た魔法使いが、目の前に跪く十六歳の少年の頭に、光の結晶を降らせている。

少年の艶やかで美しい金髪と、彫刻のように整った横顔が、その輝きを更に強めていた。

神秘的な光景に目を奪われていると、号令がかかる。

シシリ亞は慌てて手を揃えて頭を下げた。

「寂しくなるわ。立派に務めるのよ」

「はい、母上」

声変わりしたばかりの、凜とした声が耳に響く。

屋敷の女主人であるライトナー公爵夫人は、祝福を受けた少年——公爵家三男、フェリシス・ライトナーを優しく抱き締めると、馬車まで手すから誘導していった。

「……？」

背を屈めながら盗み見ていていることに気がつかれたのか、シシリ亞は一瞬だけフェリシスと目が合ったような気がした。

首を振って思い直す。

一介の使用人ごときが目が合つたなんて妄想をして、恥ずかしいつたらない。

今度こそ瞼^{まぶた}を閉じ頭を下げ、馬車に乗り込んだフェリシスを見送った。

「いつてらっしゃいませ」

彼はこれから四年間、士官学校へ行く。

卒業すれば軍隊では役職のある地位、将校になることができる。

軍人として数々の功績を残してきたライトナー公爵は、後継ぎでもなく控えでもない三男のフェリシスを、問答無用で士官学校へ入れた。

その道に危険は多く、士官候補生とは言え戦場に駆り出されることもあるようだつた。

一昨年は隣国との戦争が過激化していたが、去年は両国とも補給期間として積極的に動かなかつたおかげでそこまで大きな戦争は起きなかつた。

だから今年はどうなるのやらと、友人や知り合いたちは口を揃えて心配をしていた。

国内でも稀少^{きしょう}である魔力持ちのフェリシスは、魔法を剣に纏わせ炎^{まこと}操ることができた。誰でもできることではなく、彼が日頃訓練を積んでの偉業のなせる技だつた。

もしかしたら戦争になつた時は最前線に立たされるかもしれない。

女性の使用人たちの中にはフェリシスを慕つている人間も多く、昨日は部屋で泣いている者もいた。

最低四年は姿を見ることが適わず、命を落としてしまうかもしれないとも思うと、とても気が気がではないのだろう。

七歳から公爵邸で使用人として務めているシシリ亞も当然、フエリシスのことを心から心配している。

こんな状況のさなか、士官学校へと向かう彼の身の安全と将来を天の神に祈った。

(どうかご無事で、健康に気をつけて、風邪をひいても一日で治りますように……でも休める時は休んでもらいたいからやつぱりほどほどな症状でそれなりに長引かせて休暇をとつてもらつて)

願い事にしては小生意気な注文である。

そうして見送りが終わりそれが持ち場に戻るなか、シシリ亞は目当ての人物を見つけた。

「侍女長、お時間少しよろしいですか？」

「あらシシリ亞、そんな悲しそうな顔をして……。大丈夫、四年なんてあつという間よ」「いえつ、お坊ちやまがいなくなるのは寂しいですが……あの、そうではなく。これを」一枚の紙を差し出す。

「……え？」

丁寧に四つ折りされていたそれを開いた彼女は、自分の手元とこちらを交互に見た。

一年後。

十六歳になつた日に、シシリ亞・ニルラットはこの屋敷を去つた。

Characters

* 登場人物紹介 *

婚約を解消されたばかりですので、
溺愛はご遠慮くださいませ

櫻井みこと



公爵令嬢

リュエンヌ

ドルティー王国の公爵令嬢。
王太子の婚約者。
次期王妃として努力し続ける
真面目な性格。



第二王子

アルノー

ドルティー王国の第二王子。
頭脳明晰で思慮深い。
兄の婚約者である
リュエンヌを密かに
慕っている。

「リュシーといふと、息が詰まるよ」

どこからかそんな声が聞こえてきて、グラント公爵令嬢のリュシエンヌは、思わず足を止めた。

（今のは、もしかしてエリク？）

エリクは、このドルテイー王国の王太子であり、さらにリュシエンヌの婚約者である。

今夜はドルテイー王国の王城で、パーティが開かれていた。

見合いの場というよりは、同じ派閥の者たちで集まっていることが多い。
参加しているのは未婚の若い貴族ばかりだが、すでに婚約者が決まっている者が多数である。お

王太子の婚約者であるリュシエンヌも彼の傍から離れ、同じ派閥の令嬢たちと過ごしていた。

エリクもまた、いつものように親しい友人たちと楽しい時間を過ごしているだろう。

令嬢たちとの会話も一段落した頃に、リュシエンヌはそろそろ婚約者の傍に戻らなくてはと、会場を出てエリクの姿を捜していた。

そのときに聞こえてきたのが、あの声だ。

リュシーとは、親しい人だけが呼ぶ、リュシエンヌの愛称。

つまりエリクは、自分といふと息が詰まる、と愚痴を言つてゐるのだ。

リュシエンヌは周囲に誰もいないことを確認して、バルコニーの様子を探つた。

国王と同じ金色の髪。^{ぜいたく}そしてすらりとした高い背は、間違ひなくエリクである。

〔贅沢なことを仰りますね。リュシエンヌ様は、あれほど素晴らしいご令嬢ではないですか〕

エリクと会話しているのは、おそらく宰相の息子であるキロフだろう。

キロフの言葉は、リュシエンヌを褒めたたえているように聞こえるが、実際の口調はエリクをいたわ労り、同情するようなものだった。

「ああ、たしかに素晴らしいだろうね」

エリクは特別に親しい人にだけ話す、碎けた口調でそう言った。

「あのグラント公爵家の令嬢だけあって、顔立ちも美しい。髪色は地味だけれど、所作も品があつて完璧だ」

そんな言葉が聞こえてきて、リュシエンヌはとつさに自分の髪に触れる。

グラント公爵家は歴史のある名家で、かなりの資産家でもある。

そして家族皆、美男美女ばかり。父も母も、そして兄も煌めくほどに美しい金色の髪をしている。
でもリュシエンヌだけは、淡い茶色の髪をしていた。

父方の祖母に似たらしいが、華やかな家族の中でひとりだけ地味な髪色になつてしまつたことを、幼い頃からずつと気にしていたのだ。

（エリクも、私のことを地味だと思っていたのね）

そんな言葉に胸が痛むのは、表向きはリュシエンヌの髪色を、優しい色だと褒めてくれていたからだ。それを真に受けて喜んでいたことが、恥ずかしい。

「あのグラント公爵家の方々と並んでいると見劣りますが、充分にお美しいと思いますよ？」

そんなエリクの言葉に応えるキロフも、家族の中にいると見劣りするとはつきり口にしていた。

「だが私との会話は、いつも政治や国際情勢ばかり。いくら見た目は美しくとも、中身はキロフの父親と同じようなものだ。そんな女性と一緒にいて、心が休まると思うか?」

「ああ、たしかに。中身が父のような女性は、どんなに美しくても遠慮したいところですね」

そう言って、ふたりは笑い合っている。

「まったく、眞面目^{まじめ}で面白みのない会話ばかりで、疲れるよ。周りの令嬢たちも、辟易^{へきえき}しているのではないか?」

「リュシエンヌ様は、次期王妃陛下ですから。周囲も割り切って、うまく盛り立てていらっしゃるのでは?」

「……」

これ以上聞いていられなくて、リュシエンヌは身を翻した。

今までリュシエンヌは、王太子の婚約者として、次期王妃としてふさわしくあろうと、努力し続けていた。

勉学はもちろん、この国の歴史や法律。さらに周辺国の言語や経済も学んだ。

髪色だけは変えようがない。それでも外見にも気を遣い、流行のファッショńも把握してきた。

ダンスは今でも少し苦手だったが、それでも練習を続けて、人並み以上には踊れるようになつている。

Characters

* 登場人物紹介 *

大好きな幼馴染が 英雄騎士になりました

星見うさぎ



伯爵令嬢

ミラ



子爵家三男／王女の護衛騎士

ローレンス

人の感情が色で見える
特殊な目を持つ。
幼い頃はそのせいで
人間不信になっていたが、
ローレンスに救われ、
結婚の約束をするのだが
.....。

子爵家の三男だが、
魔物討伐で英雄と言われる
ほどの大きな功績をあげ、
王女の護衛騎士となる。

「ねえローレンス。大きくなつたら、私のことをお嫁さんにしてくれる?」

「もちろんだよミラ。じゃあ僕は将来大好きなミラを守れるようにすごい騎士になる! だから、待つてて!」

私の手を握つてほつぺにキスをしたローレンスは、お守りだよと言つて可愛い鈴をくれた。

嬉しくて嬉しくて、その鈴は私の宝物になつた。いつも持ち歩いて、辛いことや嫌なことがあるとそれを握つて自分を励ました。

ローレンスが騎士になるために遠方の騎士学校に通い始めて会えなくなつても、「いつか迎えに来るから」という言葉をただ信じていた。

……そう。そんな幼い頃の約束を、ずっと信じてきた。いつか、いつか、ローレンスは私を迎えてくれるのだと、本気でそう思つていた。

思わず鈴を握りしめる。そのチリンという音とともに魔法が解けた気がした。

全ては私の勘違いだつたのだ。

そりや、そりだよね。もう何年も会つていない幼馴染との、小さな頃のただの口約束。そんなもの、本気にする方がおかしかつたのだ。

ダイアナ王女殿下の就任した護衛騎士を披露するパレードで。多くの民に見守られる中、離れた場所にいるローレンスは甘く優しい微笑みを浮かべ、王女殿下と見つめ合つている。



私、ミラ・セスター伯爵令嬢は生まれつき特殊な目を持つていた。

人の感情が、色付きのモヤのようなものとして見えるのだ。

たとえば、嬉しい時や親愛・友愛の気持ちを抱いている時は黄色。

怒りや相手を害したいという気持ちを抱いている時は赤。

悲しみや辛い思いを抱いている時は青、など。

他にも、嫌悪感は灰色だつたり、気持ちが混ざるといろんな色が混じつて見えたりもする。

それが理解できるようになるまで、色々なことがあった。

まだ幼かつたある日、私はお母様の顔の横に向かって手を伸ばしながら言つた。

「お母様、皆の周りにあるこの色のついたふわふわはなに？」

その時、お母様の顔色が変わるとともに、黄色だつた周りの色も灰色に変わつた。

当時はそれがどういう意味を表しているのかよく分からなかつたけれど、なんとなく良くないことが起きたのだということは感じ取り、心臓がドクンと嫌な音を立てたのを覚えている。

今思えば、お母様は私がどこか普通じゃないのではないかと気づいていたんだと思う。私は人の

顔の周りにふわふわと漂う色のついたモヤのようなものが気になつて仕方なかつたから、顔を合わせていても度々視線は合わなかつたはずだし、それまでにも時々手を伸ばしたこともあつたと思うから。

だから、お母様が私を「気持ち悪い」と感じるようになつたとしても。それは仕方ないことだつたと思う。

色のついたモヤのことを口に出すと良くないことが起きる。幼い私はざつくりとそう解釈して、それからモヤのことを口に出すことはなかつた。

とはいえ表情や声色、態度の変化と色の変化の関係性や前後の出来事や会話など、経験を重ねるにつれて、いつしか自然と理解した。

——私には、人の感情が色として見えている。

あの日、お母様の私に対する感情が好意的なものから嫌悪を含むものに変わつたこともまた、分かつてしまつた。

あの時の出来事をきっかけに、どこかお母様は私によそよそしくなつた。それは翌年に弟が生まれると顕著になり、両親は弟ばかりを可愛がるようになつた。

ううん、少し違う。お母様もお父様も、私のことも可愛がつてくれようとしていた。私に能力がなければ、「ちよつと弟^{ひいき}鼠^{ねずみ}員^{いん}だけど、弟は跡取りだしこれくらいは仕方ないのかな」と多少モヤモヤするくらいで、受け入れられた程度の扱い。